

「木は地球を救う」 — 4

細田木材工業(株)
相談役 細田 安治

木づかいでつなぐ都市と農村

一般財団法人地域活性化センター主催による「2018 地方創生フォーラム in 東京」に参加した。基調講演で「日本の森と暮らしをつなぐ」と題してテレビなどでおなじみ造園家の涌井雅之氏、建築家隈研吾氏のご講演を拝聴した。地球を救う-4として読者のご参考にご供したいと存じます。

日本の森と暮らしをつなぐ

成長の限界

涌井雅之先生は冒頭、地球環境は大気汚染で危機に瀕している。気温の上昇、CO₂の排出量、人口の増加の3つの曲線が急上昇している。1972年に国際的な研究・提言機関ローマ・クラブが発表した報告書では、将来も人口の爆発的増加と経済成長が続いた場合、人口、食糧生産、資源、環境などの問題を総合的に検討すると、100年以内に地球の成長は限界に達する。現在2018年で46年(約半世紀)経過した。

COP21

2015年にはフランスのパリでCOP21(第21回締約国会議)が開催され各国が新たな枠組みに対する約束草案が提出され、国別の削減目標が提出された。世界の主要国が地球を守るために議論している。

地球上の約3千万種の生物が全て生き残るには、気温の上昇は2度が限界値。半世紀経過した時点の気温を1.15度に抑えたい。ところが既に1.5度上昇しているのであと0.5度しか余裕のない危機的状況で、CO₂排出量も上昇している。人口も増加している。正に危機的状況だ。

世界人口72億人が企業活動のため、生活のためCO₂を排出している。これを食い止めるには今のところ森林に期待する他なし。地球の陸地面積は約130億ha。そのうち森林面積は約3分の1弱の40億haであり、砂漠地域の分も含まれている。砂漠地域では植林はほとんどできない。できたとしても非効率だ。



環境庁ホームページより

CO₂の固定は木に頼るしかない

木は立木の時は、CO₂を吸収し酸素を吐き出す。やがて老齢樹となり、これ以上CO₂吸収できない老齢樹は、CO₂を体いっぱい固定したまま伐採され、運ばれ形を変え流通し、やがて街に森をつくる。流通経費は価格に上乗せされ、やがて山に帰り伐採地跡に木が植えられる仕組みである。ところが林業家

は、伐採した材価で植林に要する費用や間伐などの維持費が出てこない。補助制度を加えてもまだ足りず1ha当たり数十万円の持ち出しとなる。そこで林業家は投資意欲を失い植林せず放置するケースが多い。講師の話しでは日本の林業家と木材業者がバラバラな動きをしている。公益(CO₂吸収)が木材価格に上乗せできずにいる。結局伐採した分だけ森林面積が減ることになる。統計によれば年間8千万haの森林面積が減少している。ここが筆者の間違いならご遠慮なくご指摘願いたいと存じます。このことがCO₂固定と言う公益的に見て宝の持ち腐れとなっている。

ところが統計によると日本の森林面積は減っていない。昭和41年から平成24年まで約半世紀森林面積は横ばいで推移している。

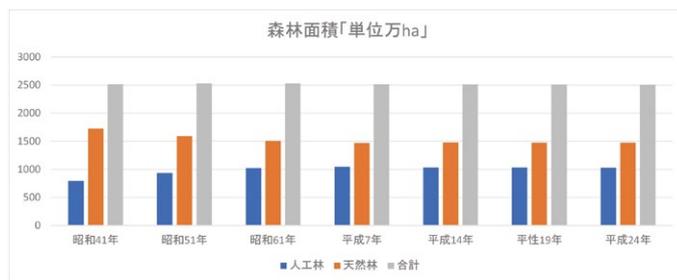
◆木を見直すゆとりを

日本の森林面積

過去45年間(約半世紀)増減無く日本の国土面積の約7割(66%)を占めている。人工林は昭和41年と比べて約30%増加1000万haにも達している。戦後の拡大造林の為だ。拡大造林とは伐採した跡地や原野などを中心に計画的に、人工林に置き換えることである。同じ期間に天然林や原野が15%減少している。天然林や原野が人工林と入れ替わっていると理解した。

◆増え続ける森林蓄積

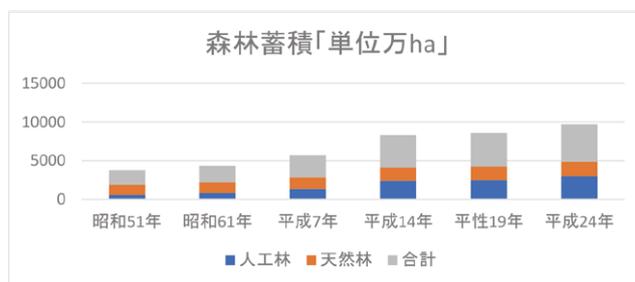
森林蓄積とは「樹木を構成する幹の体積」のことで、森林資源の目安となっている。グラフで見ると森林蓄積は増え続け特に人工林(育成材)の蓄積の増加が目立つ。森林面積はほぼ横ばいで増減なしだが、森林蓄積は年々着実に増え続けている。昭和41年と比べて平成24年には2.6倍に増加しているのがわかる。特に人工林(育成材)は5.5倍に増大した。このように日本では過去40年から50年間森林面積は増加せず、蓄積量だけが増えている。これは、日本の使うべき資源が充実してきていることを意味する。



林野庁 ホームページより

◆国有林と公有林と私有林

国有林とは国有地にある森林、公有林とは社会的意味を持つ森林、企業と地域との交流、子供たちへの木育社会貢献的意味を持つ森林。私有林とは、民間人が持つ森林。



林野庁 ホームページより

◆里山と鎮守の森と集落林

日本の「里山」では、代々住み着いている人々が、手入れを怠らず自然を守っている。人々は里山から様々な恩恵を受けている。講師はこのように人が手をかけて作り上げ、更に手入れし維持されてきた自然を「二次的自然地域」と名付けている。このような形態は世界中に存在しているが、今この利便性を追求する開発によって、「里山」としての利用形態が失われつつある。

日本の童話の『桃太郎』を思い出すと、「昔々・・・おじいさんと、おばあさんが・・・おじいさんは山へ芝刈りに、おばあさんは川へ洗濯に・・・」、そこへ桃が流れてきて中から桃太郎が生まれた。この一連のストーリーに日本の里山文化、集落の伝統が流れている。里山、集落を大事にすること。里山には木があり森がある。鎮守の森があり周囲には信仰する人々の集落がある。人々の生活があり木がある。この木が生活の原点であり、木は地球を救うに繋がる。

続く



里山

出典：http://www.pref.ishikawajp/sizen/satoyama/satoyama/img/i01_01.jpg